

くらし：家庭

少女マンガと ジェンダー

中川 裕美 ⑤

本連載の第2回・第3回で紹介したように、少女マンガの黎明期を支えた水野英子ら作家の取り組みは、1970年代に至って一気に花開いた。

しかしながら70年代の少女マンガは、それまでとは異なる壮大な物語を取り上げ、少年マンガと肩を並べるに至った一方で、読者である少女にとって「身近な物語」ではなくなってしまった。そのためか70年代末頃から少女マンガは、その前身である戦前の少女小説のような「少女の夢や憧れを詰め込んだ世界」を少女に見せる、という役割へと回帰していったのである。

現実の日常生活
立ち返った少女マンガは読者と同年代の少女たちを主人公とし、現実の少女たちの日常生活の延長にあるさまざまな出来事を描いた。桜あおい

『星の瞳のシルエット』



本棚にすらりと並ぶマンガ



『星の瞳のシルエット』は、いまも子どもたちに読まれています

「淡い恋」と未来の夢

(ジブリ映画にもなった『耳をすませば』でも知られる)による『星の瞳のシルエット』(85年)(表紙は、「どこにでもいる普通の女の子が、憧れの男の子に恋をする」という作品の一つである)。

バイブル(連載途中で「2500万の女のバイブル」へと上昇)は、この作品の人気の高さを象徴するものであった。この作品では中学2年生から大学生になるまでという長い期間を描いているにも関わらず、登場

人物がわずかに2名しか増えない。すなわち極めて狭い世界で物語は完結しており、そうした世界観は70年代の少女マンガが持っていた壮大さとは縁遠い。

人生の目標描く

例えばクッキングクラブを作りたいと教師に申し出た際、「あなたたちは日本女子の鑑ですっ!!」と喜び感動する教師に、香澄たちがうんざりした表情を浮かべ、「のる先生だなあ……」と呆れる様子が描かれている。また最終回の、香澄が親友の真理子と沙樹の3人で将来の夢を語り合うシーンでは、「お嫁さん!」と聞かれた香澄が「カウセンセラ……なんていと思うのね、心理学やってみたいんだ」と答える。そして沙樹もまた同様の質問に対し、「あたしは弁護士になりたいのっ!!」と毅然と返す。この作品は「恋の物語」と同時に、彼女たちにとって「お嫁さん」が「夢の最終地点」ではないということを明確に描いている点で興味深い。

桜は読者である少女に対し、等身大の「淡い恋物語」を描いてみせたが、そこだけにとどまるのではなくその先にある現実をも提示している。そしてその現実とは、戦前の少女小説のように「家庭に入る」「母になる」ことではなく、自身自身の人生の「目標を持って進むこと」として描いているのである。「250万」の読者が読んだ作品において、こうした人生の目標が描かれたことの意義は大きい。

次回は「戦う少女」をテーマにした作品を取り上げる。

(日本出版学会理事・大学講師) (金曜掲載)



『星の瞳のシルエット』(桜あおい作/集英社)